Osaka University Knowledge Archive

Title	劉吶鷗研究
Author(s)	陳, 麗
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24963
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【14】

氏　　名	陳（チン）　麗（レイ）(CHEN LI)
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２６１４０　号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	**劉吶鷗研究**
論　文　審　査　委　員	(主査) 言語文化研究科教授　青野　繁治 (副査) 法学研究科教授　田中　　仁　　准教授　平田　恵津子 言語文化研究科准教授　今泉　秀人　　言語文化研究科准教授　林　　初梅

論　文　内　容　の　要　旨

劉吶鷗（1905～1940）は日本統治下の台湾に生れて少年時代から日本語を学び、中

学校を卒業した後日本に留学した。1926年留学先の日本を離れて中国の上海に渡り、福建人と自称して文学活動を始めた。上海で知りあった文学仲間と一緒に書店を開いて雑誌を刊行し、翻訳及び文学創作を試みた。1930年以降劉吶鷗は小説の筆を折り、映画界で活躍するようになった。流暢な日本語を活かして映画界の日本人と綿密な往来を繰り返した。1940年汪精衛政府主催のメディア「国民新聞社」の社長に就任したわずか二ヶ月後に暗殺され、死後「漢民族の裏切り者」（“汉奸”）の名を冠せられている。

劉吶鷗が翻訳した短編小説集『色情文化』は新感覚派の作品が大半をしめており、該書の付録には新感覚派のことが紹介されていた。彼の創作した短編小説集『都市風景線』に新感覚派の特徴が見られることもあり、劉吶鷗は中国の「新感覚派の作家」と呼ばれるようになった。劉吶鷗の作品が発表された直後の1930年代に社会から感想や議論が出されたものの、その後の半世紀の間、劉吶鷗の名前は文学史の舞台から消えていた。1980年代以降、中国文壇に起きた「文学史を書き直そう」（“重写文学史”）の運動の影響により、劉吶鷗の作品は再び中国の研究者に注目されるようになり、その後アメリカ、台湾、日本にも研究者が現れた。

劉吶鷗の作品に関する研究は新感覚派及び現代派作家としての位置についてのものが多く、劉吶鷗本人の恋愛経験と婚姻状況を裏付けに作品に登場する「肉欲に溺れた男女」との関連を考え、劉吶鷗が描き出した女性像から劉吶鷗の妻と恋人の投影を発見したものもある。

本論文では従来の研究成果を踏まえた上で劉吶鷗の翻訳小説集『色情文化』と創作小説集『都市風景線』に収録される作品を比較しながら分析を行い、作品の創作時期と社会背景の関連性を通じて作品の創作原点、劉吶鷗文学のルーツを探ってみた。

第1章では『都市風景線』から見られる描写方法について考察を行い、劉吶鷗が作品を創作する際に擬人法を使用し、色彩と匂いと光の使用に拘り、登場人物の名前をアルファベット1文字で表す手法を用いたことを指摘した。擬人法の使用において自然の風景をはじめ、車や店のドアに生命を与え、夕暮れの日差しに感情を与え、深夜の街に立つ街頭の光を病人の顔色にたとえて表現する技法を使用した。このテクニックは『色情文化』に収録される日本の新感覚派の作品にも見られることにより、劉吶鷗は翻訳作業を行う際に新感覚派の擬人法を学習し、自分の創作作品に生かしたのだということが分かる。色彩と匂いと光の使用において劉吶鷗は拘りを見せていた。映画館の空間を描写する際に紫、ピンク（石竹色）、白（禿げた頭）、黒（熊）、褐色、緑（翡翠）、桃色、暗黒、白い（幕）、銀色、青（海）、黄緑（草）などの十二色を用いている。またダンスホールやラブホテル空間をアルコール、汗、油、靴下の匂いで表現し、南国の自然風景を栗の香り、バラの花で飾っていた。アルファベットは多角的男女関係を説明するには最適であった。片岡鉄平の「色情文化」では五人の若い男性が一人の女性と関係を持ち、女性の夫を入れれば七人が絡むストーリーになる。作品の中では若者の五人の男性をＡＢＣＤＥで区別することによって読者に物語を理解する便利さを提供した。「色情文化」を見本にアルファベットの使用を忠実に再現したのは「方程式」である。男性主人公の亡き妻Ｙの候補者となる女性が次から次へと現れ、劉吶鷗はこれらの女性にＡ、Ｗ、Ｓの称呼を付けた。社会風景は欧米化からの影響を受けて変りつつあり、劉吶鷗の作品は日本文学、特に「新興文学」の一流派としての新感覚派から栄養を吸収して近代化された香りを匂わせたのである。

第2章では『都市風景線』に登場する女性の外見及び内面を考察し、これら女性像のモデルが大正末期の日本社会に現われたモダンガールであることを指摘した。『都市風景線』に登場する女性の髪形に「断髪」という特徴がある。「断髪」は大正末期の日本でモダンガールの象徴として知られていた。劉吶鷗は1920年から1926年まで東京に留学して日本社会を風靡していたモダンガールの現象を肌で感じていた。明治維新以降、女性解放運動が広がり、女性の社会進出が普及し、多くの女性は街頭に姿を見せることとなった。『都市風景線』に登場する女性の外見はモダンガールに一致し、言動を通じて見せる内面もモダンガールそのものであった。「礼儀和衛生」にはセックスパートナーを交換する姉妹が描かれ、「残留」には夫に死なれた直後に街頭をさまよい、異性の温もりを求める未亡人が描かれる。「両個時間的不感症者」では肉体関係を求めて男性に近づく女性が装飾男子の鈍さに激怒し、「風景」では初対面の男性を旅館へ誘う貴婦人が芝生をベッドにして男性と愛し合う。横光利一の「七階の運動」ではデパートの経営者の御曹司を張り合って焼きもちを焼く女性店員が登場するのに対して、劉吶鷗の「流」では資産家の妾、青雲を登場させ、年の離れた旦那の経済力をバックに贅沢かつ放蕩な女性を演出させた。これらの女性は物質社会の真髄を理解し、肉体を持って経済効果を得、得た経済基礎を活かし、心身の享楽を求める。昭和初期の日本社会で軽蔑の意をこめて「モダンガール」と呼ばれる女性のイメージを劉吶鷗の作品から読み取ることで出来る。

第3章では『色情文化』に翻訳収録された日本のプロレタリア文学の作品を取り上げ『都市風景線』に収録される「流」に現われる革命意識と比較考察した。1920年代日本文芸界に現われる多種多様な文芸の新しい流派が反伝統でありさえすればすべて新興文芸であると見なした劉吶鷗は、日本の文学作品を翻訳する際に思想傾向と社会的な意義が異なっても、創作方法や批判の基準の新しさが共通する「新興」文学、「尖端」文学を取り上げた。そのなかには強権に身の自由を拘束される人間の復讐を

描く作品や、風刺の意味合いを持たせつつ革命者孫文に憧れる人物を描き、愛国心を宣伝する作品もあった。劉呐鷗はこれらのプロレタリア意識を含む作品を翻訳した後「流」という資本家と無産階級との労使紛争を題材にした作品を書きあげて中国社会に起きる革命運動の一面を反映した。作品には四人もの愛人を迎え贅沢に享楽を味わう工場主の老主人、老主人の経済力をバックにして放蕩三昧に暮らす妾の青雲、親を模倣して放縦で締りがなく腐りきった生き方をする御曹司の堂文ら有閑階級の腐乱と、学生運動に参加したことで大学に除名された暁瑛の異性への愛情より革命運動を優先する革命者の姿及び、その姿に引かれて革命運動の道に第一歩を踏み出した鏡秋の成長過程を描いた。作品は労働者たちがデモに踏み切り、資本家に真正面から反抗して自分たちの利益を守るために闘争する場面で幕を下ろした。劉呐鷗は最後のクライマックスを利用して読者に強い革命意識を訴えた。

第4章では「流」の創作時期に当たる中国の社会状況を確認し、「流」と関連性のある出来事を挙げてみた。劉呐鷗が留学先の日本を離れて上海に渡った頃、中国にはいくつかの軍事勢力が存在し、軍閥混戦が行われて蒋介石による中国共産党員らが弾圧される中山艦事件が発生した直後であった。その後、蒋介石の地位が急速に上昇し、第一次北伐を始め、南京事件、漢口事件、四・一二事件、南昌起義、済南事件など出来事が続いた。1926年から1928年までの三年の間に政治と軍事状況は急速に変化していた。劉呐鷗は不安定な環境の中で「流」の執筆をした。1925年に「五・三〇事件」が発生したのを契機に一連の流血事件が起こった。中国の民衆と帝国主義列強を背景とする資本との対決が激烈化するなか、敏感に反応した創造社の知識人は「革命文学」のスローガンを揚げた。日本に留学した郭沫若、成仿吾、郁達夫、張資平、田漢、鄭伯奇らが中心メンバとして創立された創造社は反抗の精神を革命への情熱に燃やし、「文芸家の覚悟」、「革命と文学」、「革命文学とその永遠性」、「文学革命より革命文化へ」などの文章を発表した。中国文壇は革命文学の大波に揺るがされて多くの作家がプロレタリア文学に転向したが、劉呐鷗もその一人であった。「流」に描かれる革命女性――暁瑛の経歴は魯迅の教え子であり、第二夫人である許広平の経歴の一部と一致する。許広平は北京女子師範大学の学生であった時期に教師の魯迅と出会い文通によって魯迅に学生運動の指導及び人生についての見方などを学んだ。「女師大事件」の後、魯迅と許広平は北京を離れ、広東での滞在を経て上海に移住した。しかし1927年許広平と一緒に上海に移住した『阿Q正伝』の作者として著名作家魯迅は、一夜にして革命文学を主張する創造社と太陽社の標的になり、その知名度は一層高まった。上海に居住して文学活動を行っていた劉呐鷗と仲間たちは友人馮雪峰を経由して魯迅から協力を得、マルクス主義文芸理論叢書の出版業務を行った。紡績工場の抗議活動が「五・三〇事件」のきっかけとなり、革命文学運動は盛り上がり、さらに学生運動の一環である「女師大事件」が発生し、学生リーダーが大学に除名される。こういった中国の社会での出来事が劉呐鷗の「流」に反映されていると考えられる。また作品の表現形式の面では、盛んになっていた革命文学の形式の一つである「革命と恋愛」のスタイルも「流」にその面影が見られる。

最後にはこれまでの分析を整理し、劉呐鷗の代表作『都市風景線』は日本文学（新感覚派、プロレタリア文学）及び日本社会（モダンガール）からの影響を受け、中国文学（革命文学、「革命と恋愛」のスタイル）及び中国社会（五・三〇事件、女師大事件を経験した許広平の経歴）から題材を吸収して創られたものであるということ、更に劉呐鷗が日本と中国、両国の文学と社会事情に通じ、彼の創り上げた小説集『都市風景線』が日本社会に実在した風景を反映すると同時に中国社会の景色も反映している、ということを述べる。こうして、劉呐鷗が日中両国の社会状況を把握した上で創り上げた作品集『都市風景線』は日本文学と中国文学の融合であるという結論にたどり着いた。

論文審査の結果の要旨

提出された論文は『劉呐鷗論』であるが、いわゆる作家論ではなく、小説の翻訳や創作活動の分析を通して、日本統治時代の台湾に生まれ、日本で中等教育を受け、その後中国の上海に渡って、日本の新感覚派やプロレタリア文学の紹介を通して、自らのアイデンティティを模索し、映画界へも転身したが、35歳の若さで暗殺の凶弾に倒れた劉呐鷗という作家の文学的営為を論じたものである。

劉呐鷗については、近年研究が進み、2000年の台湾における『劉呐鷗全集』の編集・出版を通じて、多くの先行研究が現れた。劉呐鷗研究の開拓者である中国の厳家炎を始め、アメリカの李欧梵、台湾の彭小妍、日本の斎藤敏康、張新民、三澤真美恵らが優れた研究を発表しており、劉呐鷗という作家の人物およびアイデンティティ、それから映画界における業績について、一定の研究成果が積み上げられてきている。しかし、いずれも劉呐鷗の小説作品および翻訳活動に関する踏み込んだ研究ではなかった。

本論文は、『色情文化』の中国語翻訳と劉呐鷗の短編小説集『都市風景線』とを仔細に比較吟味することによって、劉呐鷗がいかにして、日本の新感覚派およびプロレタリア文学に学んで、自らの文学を形成したのか、を跡付けており、その試みは高く評価できる。

論文の内容は以下の通りである。

「はじめに　劉呐鷗研究に至った経緯」では、劉呐鷗という作家を知った経緯と筆者の関心のありよう、さらに中国、アメリカ、日本における先行研究について言及し、本論文全体の概要を述べている。

「第１章『都市風景線』における多様な描写方法」では、『都市風景線』におさめられた短編小説の描写方法に着目し、「擬人法」、「色彩、匂い、光を使った演出」、「アルファベットを使った人名」の３点にわたって、劉呐鷗が翻訳した短編集『色情文化』収録の作品のなかに、類似の描写が見られることを多くの用例を挙げて、立証している。やや理論的な掘り下げが不十分なところも見られるが、煩わしい比較考察作業を丁寧に行っている点は、高く評価してよい。

「第２章『都市風景線』に登場する女性の表象」では、劉呐鷗が『都市風景線』に描いた女性像が、大正期に現れたモダンガールに由来することを、「断髪」「自由恋愛」「性の享楽」「物質主義」の視点から分析している。劉呐鷗がそのような女性像を描いた動機として、日本の社会現象が、台湾出

身の若者に与えた強烈な印象に、その動機を求めている。確かに劉吶鷗の文学イメージ形成において、日本のモダンガール現象が大きな意味をもったことは、指摘の通りと思われるが、これらの特徴は日本だけに見られるものではなく、当時の中国にも一定存在していたのであり、中国メディアにおけるモダンガール表象の考察を欠いている点が惜しまれる。

「第３章　プロレタリア文学への接触と革命文学の試み」では、『色情文化』にプロレタリア文学系の作品も一定紹介されており、『都市風景線』にも「流」という労働争議を描く作品が収められていることに注目し、劉吶鷗がプロレタリア文学にも一定の理解を示していたこと、「流」では、ブルジョワジーの子どもの家庭教師として、やってきた暁瑛という女性を、学生運動に参加して大学を除名された経歴をもつ人物として、主人公を労働運動へと導く役割を持たせているが、この暁瑛のモデルが魯迅夫人許広平である、という仮説を立てている。確かに、魯迅と許広平の結婚については、当時ゴシップ的な扱いがなされていて、劉吶鷗にとっては関心の対象であったろうし、劉吶鷗は施蟄存とともに、上海の魯迅宅を訪ねており、日本語が出来た魯迅と劉吶鷗の間に一定の交流があった可能性は否定できないが、許広平が暁瑛のモデルであるかどうかは仮説の域を出ない。しかし、1920年代半ばから後半にかけて「革命文学」が叫ばれるなか、魯迅もまたプロレタリア文学へと転向して行くのであり、その方向が劉吶鷗を社長とする水沫書店によって具体化されたこと、劉の仲間である施蟄存も流行への迎合として「革命文学」を試みたことは、指摘を裏付けるものであり、流行に敏感であった劉吶鷗のイメージと符合する。劉吶鷗は、「流」のなかで、「恋愛から革命に傾いて行く」人物を描いており、それが、当時の革命作家たち、たとえば蔣光慈の「野祭」を代表とする「恋愛＋革命」の図式に合わせたものであるという指摘も、一定の合理性を有する。

こうして、論文は劉吶鷗の文学を、「日本文学と中国文学の融合」という形で総合評価する。この結論は、決して誤っているわけではないが、やや表層的な感をまぬかれない。しかし、論文が映画関係で劉吶鷗と親交のあった黄天佐の言葉を引き、「吶鷗は中国人、あるいは日本人ではなく、世界人なのだ」と述べるとき、この言葉は結論の言葉と響き合って、劉吶鷗という作家が目指していたものと、彼が成しえたこととの微妙な乖離を提示することになり、そこで生き方を模索してもがいている、台湾生まれで、日本で中等教育を受け、上海に渡って、書店主、編集者、作家、映画人として活躍した一人の青年の姿が浮き彫りになる。

論文としてまだ不十分な点も多いが、考察自体には興味深い論点が多く見られる好論文であると評価できよう。

以上の点から、審査委員会は、一致して、本論文が博士の学位を授与するに値するものである、と判断した。